

だんごがたんぼをつかうか（豊田町）

とよたちよう

むかし、豊田村（今の豊田町）の新田に二郎兵衛というでたち（りこう者）がおったそうな。なんでも、二郎兵衛は、二人前の仕事をするいうて、ひょうばんじゃった。

ある日のこつちや、

「二郎兵衛、あしたら屋根屋（屋根をふく職人さん）がくるんじやが、なわをのうてくれるか。」

いうて、だんがいうたところが、

「へえ、そら、ないます。」

いうて、わらをひとつも打たんと（わらをつちでうってやわらかくしないで）水にかして（ひたして）から、ほいで（そして）、それを中人（二人前でない者、年れいでいえば十四・五才の者）に引っぱらしといて、けっこに（きれいさっぱりと）のうたんや。ほいて、ひと晩のうちに屋根ふくなわを間にあわせたんじやと。

だんなは、また、

「二郎兵衛、おまえ、なんでも二人前するんじゃないが、あしたら、なんじゃ、うちのやつが金比羅まいりをしたいうんじゃ。おまえ、ひとつかごをひとりでかついで行つてくれるか。」

いうたんじゃ。ほいたら、

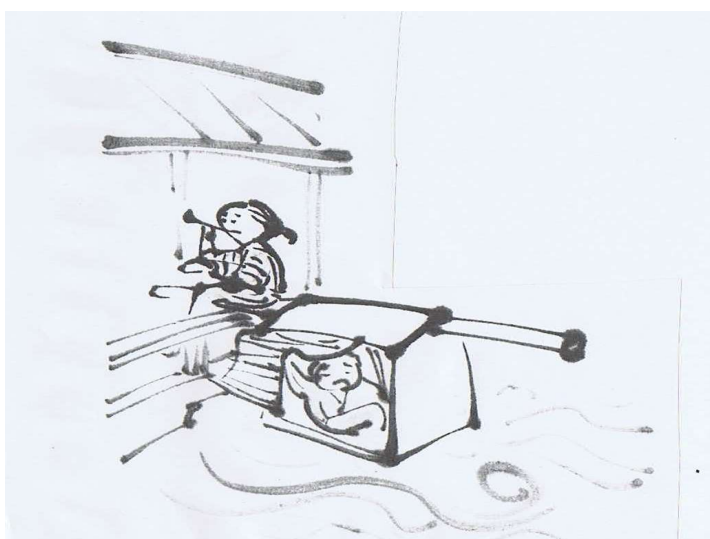
「ええ、そらだんなはん。お安いご用でござります。」

いうて、かごの反対わき（がわ）に石をくくりつけて、ほいで、かごを荷のうて（にな）

う〓かたほうのかたでささえてもちはこぶ）、金比羅まいりをしたんじゃ。ほいて、鞆（橋（金比羅にある橋）ん所で、川の方へ向けて、おくさんをかごなりつり出してからに、自分は、右足をふんまえて（ふんばって）、たばこをのむんじゃ。ほいて、ちよいちよいそのかごを水のきわまで下げたり上げたりしたんで、

「あれよ。二郎兵衛。おとろし（おそろしい）、おとろし。もうこらえてつか（ゆるしおくれ）。」

というたからに、こらいてやったんやと。ほいから、もうこれつきりいっぺんで（これ



け一度で、かごは、二郎兵衛に荷なわさんことになったんやと。

ほれから、またじゃ。

「二郎兵衛。おまえは、なんでも二人前してくれるんじやが、あしたらそのう、川之江（今の愛媛県四国中央市）と高松（香川県

高松市）へ使いがあるんじやが、おまえ、それをするか。」

いうたら、

「へえ、そらもう、お安いご用でござります。」

いうて、朝起きると、山人（山で仕事をする人、木こりなど）を二人つかまえてからに、

「おまえや（おまえたち）からの、たきもんして来てやるきん。（山へ行ってたきぎを取ってきてやるから）」

いうて、ほいて、ひとりは、川之江にやり、ひとりは、高松へやって、その役も難なくつとめたというこつちや。

また、ある日のことじゃ。だんなが、

「二郎兵衛。おまえはなんじや。だんごが好きじゃきに、あしたらだんごしてやるきん、たんぼつこうてくれ。（たんぼをほりお

こしてくれ）」

いうてから、

「あしたら、だんごがたんぼをつかうぞ。」

いうたんじゃ。

したところが、二郎兵衛は、だんごを牛んが（牛に引かせて田を耕すすきくわ）にくくりつけて、自分は、木のかげでのんびりと昼ねをしとったんや。だんなが、もう今ごろは二郎兵衛があなたんぼをつことる時分じゃろ思うて、行ったところが、ひとつもつかわんと木のかげで、ぐうぐうねよったんや。

「二郎兵衛。おまえなにごとぞ。たんぼもつかわんと。」

いうたら、

「だんなはんが、だんごがたんぼつかういうていわっしゃったきに、わしは、ためしてみたんでござります。」

いうたんやと。

（「香川のむかし話」より）